

論 説

「スラム」再考 —理論と現実—

鐵 和 弘

1. はじめに

アジア経済研究所が発行している「アジア経済」1984年第4号において、「開発途上国のスラムと社会変動」という特集が組まれており、この冒頭の「特集によせて」のなかで、森・新津(1984)は「現在、多くの開発途上国が共通に直面している社会問題として、「首位都市」(primate city) 人工の急増化にともなうスラム地区の拡大現象が指摘されている。この現象は第2次世界大戦後、開発途上国の相次ぐ独立とともに顕在化していった問題とされている。」と述べている。80年代は、開発途上国の急速な経済発展と都市での工業化がもたらした農村からの労働者の大量移動、そして、その結果としてのスラムの拡大が、発展の光と陰として先進国に住む人々の前にクローズアップされた時代であったように思われる。

例えば、この時代の日本人による研究成果としては、上述の「アジア経済」1984年第4号に掲載された、アンカラのスラム(加納)、バンコクのスラム(橋本)、ジャカルタのスラム(早瀬)、マニラのスラム(原・新田目)といった地域のスラム研究があげられる。この他、80年代のスラム研究としては、1985年にマニラのスラムに住み込み、そこでの調査をまとめた中西(1991)は代表的なものであろう。たしかに、この時代、まだ経済学の学徒ではなかった著者も、マニラ最大のスラムであったスモーカー・マウンテンのことをテレビや新聞などを通じて知り、その悲惨な状況に衝撃を受けたことを記憶している。この時代は、途上国の経済発展の恩恵が著しく不平等に広がっていた時代であり、それ故に「スラムの拡大」などの開発途上国が抱える問題が先進国の注目を浴びるようになったのであろう。

しかしながら、90年以降にも、少なくとも経済学視点から、スラムについての研究が一層盛んになっていったという事実はないように思われる。上述の地域別スラムの研究においても、フィリピンのスラムに関する中西(1991)(1995a)(1995b)などの一連の研究だけが、80年代から90年代にかけてのスラムの変貌をわれわれに示してくれるだけである。このことは、多くの開発途上国で見られた著しい経済発展がもたらした富が、トリクルダウンの理論が示すように最下層の人々にもこぼれ落ちてスラムを覆っていた絶対的貧困がただの相対的貧困へと変化し、経済学的にスラムを特別なものとして捕らえる必要性がなくなったことを意味しているのだろうか。

本稿の目的は、最初に「スラム」という概念を明らかにした後、2006年9月に訪問したタイ・

バンコクで最大のスラムであるクロントイ・スラムで得た情報を基にして、スラムの現状を報告・検討することである¹。そこで、まず第2節で、スラムとはいったいどのようなものを指すのか、その定義について考える。第3節では、スラムとインフォーマル・セクターの関係についての考察を行い、第4節では、本稿の目的であるクロントイ・スラムの現状を報告・検討する。そして、第5節で本稿を締めくくる。

2. スラム：その定義

「スラムという概念は、英国における産業革命を契機とする資本主義の発展を背景として、都市に労働者として集まってきた人々が過密集中する地域に対して使用された概念である」（新津：1989, pp.257）。今日では、「スラム」という言葉は開発途上国の大都市を連想させることが多いが、このように「スラム」という概念は、開発途上国に特有のものではない²。

最も広く一般的に使用されているスラムの定義は、国連事務局によれば、「（スラムとは）・・・密集化し、老朽化し、不衛生化し、あるいは必要公共施設やアメニティの欠如などの問題を抱えた1戸の建物、建物群、または地域であり、またこうした環境のゆえに当該地域の住民やコミュニティの健康、安全、道徳等がおびやかされているところ」とある³。また、この「スラム」と呼ばれている地域では、一部の者は地主との交渉でわずかな地代を支払い居住許可を受けている者もいるが、一方、「スクオッター」と呼ばれる、不法占拠者による不法占拠地区がスラムであることが多い。

しかしながら、「スラム」という概念は相対的な概念である。国連事務局による定義のような状態は、すでに経済発展を成し遂げた国でも経済発展の開始以前には、大多数の人々がその様な状態の中で生活していたのである。日本でさえ例外でない。したがって、経済発展と共に獲得された良好な住環境の出現によって、初めてそこから取り残された「スラム」が顕在化するのである。

実際の調査におけるスラムの定義は、例えば、「30戸以上の荒廃住宅が密集している地域であり、1970年代後半まで撤去の対象とされていたスクオッター地域は、スラム改善政策の対象とはならず調査の対象とならない」というものが、1980年代までのタイのバンコク都庁（BMA）によるスラムの行政上の定義であった。当然、この定義の下では、スクオッター地域が除かれているために、多くの人々がスラムであると認識するような地域でもスラムとは認められず、その数は少なめに報告されることになる。そして、このような定義を用いたバンコク都庁によるスラムの調

¹ スラムの訪問にあたっては、シャンティ国際ボランティア会（旧曹洞宗国際ボランティア会）タイ事務所、シーカー・アジア財団にお世話になった。この場を借りて、お礼を申し上げたい。

² 当然、日本においてもスラムといわれている地域が存在している。

³ この定義は、新津（1984）に示されていたものからの引用である。

査データは、80年代にSophon (1985)が行った「15戸以上の荒廃住宅」を対象としたスラムの調査データとはかなりの乖離がみられ、ジャーナリストや政治家の注目を浴びた⁴。そして、このことがバンコクでのスラム調査を行う際のより正確なスラム数の把握への努力を促したと新津(1998)は述べている。

このようなスラムと呼ばれる地区が開発途上国に多く出現した要因は、一つには開発途上国の経済発展に伴う都市の工業化が農村の労働力を都市部に引きつけたことによるものと（プル要因）、人口の増大によって農村部が維持できる労働力の許容量を超えたため、労働力が農村部から押し出されたことによるもの（プッシュ要因）が考えられる。プル要因とプッシュ要因のどちらが優勢であるかということに関しては、プッシュ要因が優勢であるのが開発途上国の特徴であると指摘する研究者もいるが、これに関しては反論もある。

3. インフォーマル・セクターとスラム

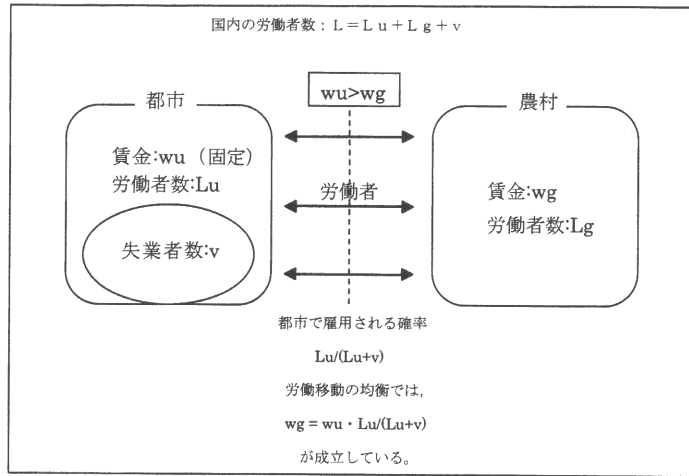
Harris and Todaro (1970) は、その論文の中で、これまでになかった新しいアイデアを用いて都市－農村間の労働移動と都市部における失業者発生メカニズムをモデル化した。このモデルでは、都市部における賃金が、最低賃金法などの原因により高い水準に固定されており、農村部の労働者がこの賃金を求めて都市部に移動することになっている。農村から都市部への労働移動は、都市部での期待賃金、すなわち、都市部での賃金に都市部で雇用される確率を掛けたものと農村部での賃金が等しくなったところで止まる。そして、この均衡では都市失業が発生しているのである（図1）。

Harris and Todaro モデルでは、発生した失業者が次の都市雇用獲得くじの抽選までの間、都市部でどのように生計を立てているかについての説明はない⁵。これに関していえば、失業者は、すでに都市部で雇用を獲得している親族・知人などに面倒をみてもらっていると解釈することが妥当であろう。そして、これらの失業者が都市部において居住できる空間というのは、当然、「スラム」ということになるだろう。このように都市でフォーマルな職を得ていない労働者の住居に関しては、バンコクのインフォーマル・セクター従事者による住宅需要を推計し、彼らによる住宅購入可能性を論じたKitti (1993) の実証研究でも、「所得階層1－3分位に属し、住宅を購入できない世帯は、総計1万3242世帯存在する。……われわれは、インフォーマル・セクターに属する世帯を明確に区別できなかったが、下位1－3分位の人々が収入源をインフォーマルな仕事に、かなり高い割合で依存していると考えている。さらに、彼らの多くは、バンコク

⁴ Sophon:1020 (Bangkok, 1985)

⁵ 実際に、「都市雇用獲得くじ」なるものが存在しているわけではない。Harris and Todaroモデルでは、都市部で雇用されなかった労働者は失業者として雇用情報を収集しやすい都市部にとどまり、次の機会を待つということになっている。すなわち、失業者は次のくじの順番を待つということである。

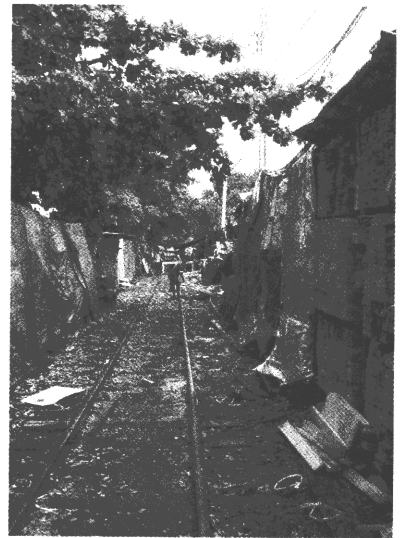
図1. Harris-Todaroモデル



のスラム地区に実際に住んでいるようである。」と示されている。

さらに、Harris and Todaro モデル以降、この都市－農村間労働移動のアイデアを利用した理論分析の発展型として、インフォーマル・セクターの存在を明示的に導入したモデルが出現した。このモデルでは、都市で仕事を得ることができなかった農村からの労働者は、賃金の水準は非常に低いがとりあえずインフォーマル・セクターと呼ばれる部門で職を得て、次の雇用獲得くじの抽選までの間、都市部で生活するという設定になっている。

ここで、インフォーマル・セクターとは、国際労働機構 (ILO) の報告書 (1972年) の中では次のような特徴を持つものとされている⁶。



スラム内のインフォーマル・セクター
現在も使用中の線路ぎりぎりに立つ木材加工場

- (1) 参入が容易である。
- (2) この部門に属する事業は家族経営から成る。
- (3) 土着の資源を利用している。
- (4) 活動の規模は小さい。
- (5) 市場はどのような法によっても保護されない。そして、非常に競争的である。

⁶ ILO: *Employment, incomes and equality: a strategy for increasing productive employment in Kenya* (Geneva, 1972)

- (6) 技術は非常に労働集約的である。
 (7) 労働者は公的教育機会を通してでなく、職場内訓練を通して技術を習得する。

しかしながら、(1)参入が容易である、すなわち、インフォーマル・セクターの労働市場が競争的市場であるというものに対しては、Romatet (1983) はインド・カルカッタのケースを取り上げ、インフォーマル・セクターにおける多くの活動が同郷人・カースト・同業者組合といった新しい参入者を受け入れないグループによって支配されていることを指摘している。さらに、中西 (1991) も、フィリピン・マニラでの調査より、インフォーマル・セクターの労働市場は同郷者関係などの非経済的・慣習的メカニズムが支配しており、競争的市場での価格メカニズムは機能していないと述べている⁷。

また、Todaro (1994) は、インフォーマル・セクターの存在が都市経済に及ぼすポジティブな面をいくつかあげる一方、その存在によって生じるネガティブな面を次のように述べている⁸。

「都市インフォーマル・セクターが農村からの移住者をどんどん吸収するので、これが農村から都市への移住希望者を増大させる。そして、この移住者の増大は、都市インフォーマル・セクターと都市フォーマル・セクターの労働吸収能力をはるかに上回り、失業の問題をさらに悪化させる原因となる。これは、都市スラムの拡大を速め、治安の悪化などといった都市地域における様々な問題の温床となる。さらにこれは、都市インフォーマル・セクターの環境を改善することによって、一層加速するかもしれない。」

農村から出てきたが都市のフォーマル・セクターで職にありつけない労働者の行き着く先としては、スラムに住み着き、ここで示したようなインフォーマル・セクターで働くしかないと考えられる。Todaroも言うように、スラムの拡大とインフォーマル・セクターの拡大は同時に起こるのである。したがって、我々がインフォーマル・セクターの存在を明示的に導入した理論的モデルを考えると、「スラム」という言葉がその中に明示的に使用されていなくとも、インフォーマル・セクターのみならず、スラムに関しても分析が行われていると考えることができる。

⁷ 中西 (1991) は、都市インフォーマル・セクターを低生産性部門と高生産性部門の2つの部門に分け、参入が比較的容易なのは低生産性部門の「廃品回収人」だけであるとし、その他の低生産性部門でさえ高生産性部門と同様に本文で説明したような理由により、決して参入が容易であるとは言えないとしている。ここでは、低生産性部門として、荷役人夫、女中、行商・露天商、臨時雇い土木建築労働者などがあげられており、また、高生産性部門として、ジープニー・トライシクルの運転手、サリサリ・ストアの経営者、大工、電気工などがあげられている。

⁸ 例えば、ポジティブな面として、「都市インフォーマル・セクターは、未熟練工や準熟練工など、その供給が絶対的にも増大しているがフォーマル・セクターでは吸収されそうにない労働者に対する需要を作り出す」など、6点が取り上げられている。

4. スラムの現状 ～クロントイ・スラム（タイ・バンコク）～

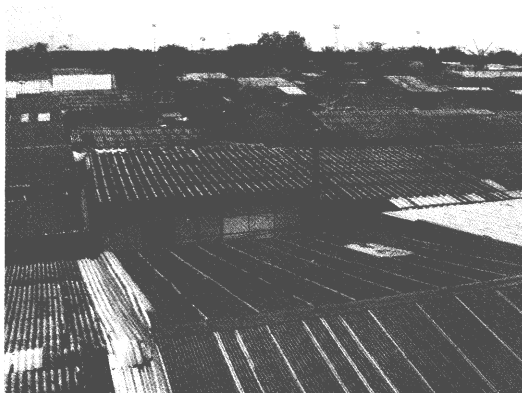
(1) 規模

Statistical Profile of BMA 2005によれば、首都のバンコクでは約1800カ所のスラムが存在し約180万の人がそこに暮らしている。表1は、バンコク都庁の調査によるバンコクにあるスラムの規模に関するデータであるが、1990年以降も拡大の一途をたどっていることが読み取れる。

また、2005年のバンコク都庁の調査データによると、タイ最大のスラムが形成されているクロントイ地区には40のスラムがあり、そのスラムに約1万6千世帯、8万8千人が居住している。そして、このクロントイ地区の最大の特徴は、クロントイ地区が、他にはない巨大な不法占拠地域であるということである。

表2は、バンコク都庁が発表している時系列データからの引用で、1999年以降のクロントイ地区の人口の変遷を示している。近年では、毎年、クロントイ地区に住む人々の数が減少していることが読み取れる。また、表3より、クロントイ地区の住人の72%がクロントイ・スラムの住人で、バンコク・ノイ地区と同様に非常にスラムが密集した地区であることがわかる。

このクロントイ・スラムの形成過程も、すでに述べた一般的なスラムの形成過程と何ら変わらない。例えば、プル要因としては、第一次タイ社会経済開発計画（1961～66年）に始まる本格的なタイの工業化が、農村労働力を都市（バンコク）に引きつけたことがあげられる⁹。具体的には、タイの海上輸送の中心であったクロントイ港が多くの人々を農村から引きつけたのである¹⁰。一方、プッシュ要因としては、しばしば発生した干ばつなどの影響を受けて農村で生計を立てることが困難になった農民たちが、クロントイ地区に職を求めて押し寄せてきたことがあげられよう。このようにして、バンコクにやってきた農民の多くは、条件は悪くとも職場であるクロントイ港のすぐ近くに利用されずに放置されていた国有地の上に粗末な住居を建て住み始めた。これがタイ最大のスラムであるクロントイ・スラム形成の始まりである。



粗末な家がひしめき合うクロントイ・スラム

スラムの拡大は、このようなプル要因とプッシュ要因の両方が何らかの影響を受けて強められ

⁹ 実際のタイの工業化は、1954年の「産業奨励法」の制定に始まるとされているが、しかし、この法は産業の活性化に失敗したといわれている。また、通貨危機が起こるまでのタイ経済について知りたければ、原田泰・井野靖久『タイ経済入門（第2版）』日本評論社、1998年が読みやすい。

¹⁰ クロントイ港は、タイ湾からチャオプラヤー川を約30キロさかのぼったバンコクの中心地から非常に近いところに位置している。世界銀行のローンで1951年に開港し、以来、海上輸送の中心地としての役割を果たしてきたが、現在は、91年に開港したバンコクの東南約130キロにあるレムチャバン港にその地位を譲り渡している。

ると著しくなると考えられる。クロントイ・スラムの拡大は、まさにその結果であるといえよう。

表1. バンコクのスラム

年	スラム地区	スラム人口	バンコク人口	スラム人口比率(%)
1990	981	946,839	5,439,081	17.4
1996	1,246	1,247,175	5,584,963	22.3
2005	1,798	1,824,982	5,658,953	32.2

(出所) *Statistical Profile of BMA 1990, 1996, 2005*

表2. クロントイ地区の人口

1999年	2000	2001	2002	2003	2004	2005
142,029	138,803	136,467	134,802	133,131	125,254	122,919

(出所) *Statistical Profile of BMA 2005*

(2) インフラストラクチャー

新津(1984)は、スラム地域の立地上の特質として、(1)河川・港湾・鉄道線路沿いなどの公共用地で、不法居住取り締まりが厳しくなかった場所、(2)水はけが悪く、居住には不適切な場所とされ、放置されていた場所、(3)比較的都市部への接近が容易であるため就業上、便利な場所、(4)かつて近くで大規模な建設工事が行われ、多くの労働者が仮設小屋などを建てて居住していた場所をあげているが、これら特質の全てがクロントイ・スラムにあてはまるものである。

また、新津はスラム内の様子を、(1)学校・病院などの公共施設は未整備のままである、(2)電気・上下水道・道路などは整備されていない、(3)大規模なスラムではその内部は迷路のような構造になっており、居住者の案内なしでは通り抜けることが困難であると述べている。クロントイ・スラムでは、その内部は確かに迷路のような構造ではあるが、現在では、学校・病院といった施設は整備されており、エイズ患者のためのホスピスも存在する。また、バンコク都の管轄により保育園の運営も行われている。ただし、これに関しては、そこで働く保育士の質といったソフト面での改善が課題であるという。電気・上水道は各家庭に供給されており、これを利用した貸し洗濯機業を営むものも見られる。80年代のスラムでは、ぬ



スラムの内部

表3. バンコク50地区における地区人口に占めるスラム人口の比率 (2005年)

地 区	地区人口	スラム人口	スラム人口の比率
Bangkok Noi	133,669	99,400	74%
Khlong Toei	122,919	88,392	72%
Lak Si	116,713	68,580	59%
Lat Krabang	138,327	73,158	53%
Min Buri	118,019	57,400	49%
Khlong San	87,853	42,633	49%
Sai Mai	165,491	79,840	48%
Saphan Sung	83,147	39,309	47%
Don Mueang	159,506	74,759	47%
Bang Phlat	108,597	49,438	46%
Pathum Wan	63,192	28,104	44%
Thon Buri	136,971	58,105	42%
Bang Na	101,667	41,894	41%
Bang Kho Laem	105,685	42,964	41%
Bang Khen	178,986	72,614	41%
Bang Khun Thian	132,313	48,558	37%
Phra Nakhon	67,357	24,352	36%
Suan Luang	115,120	41,592	36%
Phasi Charoen	136,240	47,883	35%
Sathon	95,089	33,309	35%
Bang Rak	50,023	17,303	35%
Nong Khaem	128,493	42,852	33%
Phaya Thai	77,232	25,071	32%
Nong Chok	126,126	38,551	31%
Bang Sue	151,788	44,837	30%
Dusit	121,336	35,572	29%
Chom Thong	167,175	44,937	27%
Phra Khanong	98,564	25,803	26%
Bangkok Yai	81,727	21,162	26%
Samphanthawong	31,674	8,085	26%
Khan Na Yao	84,080	19,623	23%
Prawet	142,633	33,100	23%
Khlong Sam Wa	132,172	29,895	23%
Bueng Kum	138,501	30,987	22%
Huai Khwang	76,213	16,968	22%
Rat Burana	94,097	19,865	21%
Thung Khru	107,609	22,406	21%
Ratchathewi	99,827	18,673	19%
Bang Khae	189,257	34,978	18%
Vadhana	80,121	14,698	18%
Lat Phrao	117,711	21,008	18%
Pom Prap Sattru Phai	60,001	10,551	18%
Din Daeng	146,031	24,613	17%
Taling Chan	105,730	17,766	17%
Chatuchak	169,113	28,024	17%
Bang Kapi	149,093	22,338	15%
Wang Thonglang	114,132	16,807	15%
Thawi Watthana	66,354	8,827	13%
Yan Nawa	88,556	10,458	12%
Bang Bon	96,723	7,174	7%

(出所) *Statistical Profile of BMA 2005*に基づき筆者が作成

かるんだ地面の上に板を渡し、その上を歩道として歩くという状態であったのだが、現在では、歩道は舗装されており、雨期の大雨がやんだすぐ後にクロントイ・スラムの内部に進入したにも関わらず、それほど足下を気にして歩く必要がなかった。衛生環境に関しても、クロントイ・スラムでは、「ゴミと卵を交換するリサイクル運動」やゴミと交換に苗木をもらうという「クリーン&グリーン・キャンペーン」を実施しており、その取り組みのおかげか、「常に悪臭が漂う不衛生な場所」という誰もがスラムに対して持つイメージが圧倒的な力強さで我々に迫ってこなかった¹¹。

(3) 消費活動

80年代前半に行われたバンコクのスラム調査をまとめた橋本（1984）の中で「一般的にスラムは劣悪な居住環境にあり、その住民は家具や耐久財消費財等をほとんど所有していないという先入観がもたれているが、バンコクのスラムはけっしてそうでない」と述べられている。表4は、その調査から得られたバンコクのスラムにおける耐久消費財保有率を示したものである。

1982年の時点でも、バンコクのスラムでは83.6%の世帯がテレビを保有していたということであるが、現在、クロントイ・スラムでのテレビの保有率は98%に達するという。スラムの住民にとって、テレビは外部の情報を知るための貴重な手段であり、借金をしてでも手に入れようとするということである。また、最近のスラムの住民の中にはパソコンを所有しインターネットに接続している者や、自動車を保有する者もいる¹²。

表4. バンコクのスラムにおける耐久消費財保有率（1982年）（%）

ラジオ	時計	テレビ	ミシン	扇風機	テープレコーダー	冷蔵庫	ステレオ
85.1	74.4	83.6	39.0	88.0	45.2	45.2	23.0

（出所）新津・橋本（1984）

（注）保有率＝耐久消費財保有世帯／（250－不明の世帯）

(4) 住居

もともと港湾局が管理する土地の上に、地方から出てきた港湾労働者たちが無断で住居を建てたことに始まるクロントイ・スラムでは、そこに住む人々はスクオッターであり、その住居には住所さえ与えられていなかった。このことは、スラムに住む子供たちから教育を受ける権利を奪い、「貧困の悪循環」を断ち切る手段を失わせることになっていた。しかしながら、スラム改善

¹¹ 秦（2003）によれば、ゴミを分別収集してそれを卵と交換する方法は、わかりやすく、しかも栄養価が高い卵をもらえるということがモチベーションとなり、たちまち多くのスラムへ波及していったということである。

¹² やせこけた汚らしい犬でなく、日本でもよく見かける愛玩犬を飼っている住民もいた。

政策のもと、1986年にはスクオッター地区にも住所が与えられることとなり、子供たちの通学が可能になった。スラムの住民も教育の大切さを理解しており、スラムに住む子供のほぼ全員が小学校に通い、中学校には約7割の子供が通っている（バンコク全体では8割）¹³。また、5割以上の子供が高校へも進学している。

クロントイ・スラムのように空き地であった場所に無断で家を建てるといっても、空間には限界がある。そのため、新規に住居を建てる空間がなくなると、新規の移住者は先住者の家を借りるか、間借りして、そのスラムの一員となるしかない。このようにスラムが飽和状態になると、スラムの人口増加は速度を緩め、やがてストップする。実際にクロントイ・スラムでもこの飽和現象が起こっているということである。我々がデータからこれを確かめようとしても、表2が示すクロントイ・スラムの人口減少だけでは、その人口減少の原因がスラムの飽和によるものなのかどうかは判断できない。しかし、表1は、我々にバンコクのスラム人口は増加していることを教えてくれる。そして、この事実と表2よりわかるクロントイ・スラムの人口が減少しているという事実より、我々は、実際にクロントイ・スラムが飽和状態になっているのではないかと考えることができるのである。

クロントイ・スラム内には、スラムを囲むような形で中層のアパートが存在する。これは、福祉アパートと呼ばれるもので、スラムを撤去して、住人をこのアパートへ移動させようとした国のスラム改善プロジェクトの一環として建てられたものである。しかし、多くの住民はこのアパートへの移動を拒否したという。というのも、その費用の負担の問題もあるが、アパートに住むことによって、スラムの中で維持してきた社会関係が崩壊することをスラムの住民が恐れたからであるという。実際、スラムの住民にとって、バンコクのような大都会で暮らしていくためには、スラム内での相互扶助的的社会関係は欠くことができないものと考えられる。現在、この福祉アパートには、スラムの住民から権利を譲り受けた、多くの一般市民が移り住んでいる。また、スラムの住民の中には、スラムを出て行っても十分に生活できる者もいる。しかし、彼らがスラムにとどまる理由は、スラムの中の社会関係を好み、それを失いたくないからなのだ。「陰鬱で猥雑で不潔な場所」というイメージがつかまとうスラムであるが、一旦そこに住み着くと、住民がそこを離れる気持ちを起こさせなくする何かも、また存在しているようである。

5. むすび

スラムのとらえ方には2つのタイプがあるという（新津：1984, pp10-11）。一つは、「悲観的スラム論」と呼ばれるもので、スラムは都市住民の生活態度をむしろ、無気力な存在にしてしま

¹³ タイでは小・中学校の授業料は無償であるが、教科書、制服、食費（給食という制度はない）などにお金がかかる。スラムでは、これが大きな負担となる家庭もたくさんある。

うというものである。もう一つは、「楽観的スラム論」と呼ばれるもので、スラムは都市流入者にとって都市への適応を助ける社会的装置となっており、生活態度を低下させてしまうどころか、向上させる契機として機能しているとする楽観的なものである。タイのスラムに関していえば、橋本（1984）は、80年代前半に行われたタイの国家機関や大学の調査に目を通すと、タイのスラム住民は社会不安の温床であるといった悲観論はほとんどないが、彼らが発展の担い手となるという楽観論も見当たらないと述べている。

現在のバンコクのスラムはどうなのであろうか。今回のクロントイ・スラムの訪問を通じて、我々が感じたことは、少なくともクロントイ・スラムにおいてはスラムが住民の生活態度をむしろ、無気力な存在にしてしまうという悲観論よりも、彼らの生活態度を向上させる契機として機能しているという楽観論の方が優勢ではないかということである。ただし、これはスラムをほんの一瞬垣間見た者の印象論にすぎない。

我々がスラム内部に進入した午後2時頃という時間帯は、男たちは仕事に出かけ、子供たちは学校に行っていた。そのため、スラムの内部は非常に静かで落ち着いていた。スラムの内部で時折出会う住民の多くは年配の女性か小さな子供で、その表情は穏やかで生活の厳しさを感じるものがなかった。さらに、小学校の放課後にシーカー・アジア財団に集まってきたスラムの子供たちとの交流の中で、彼らの生き生きとした姿を見た。我々がスラムの中で目撃した風景だけを見れば、このスラムが「悲観的スラム」であるというよりむしろ「楽観的スラム」であるという印象を持った。しかし、スラム内部の様子に関しては、もし違う時間帯にこの場所に来たならば、我々の印象は一変するかもしれないことは容易に想像できる。

現実には、スラムへ向かうタクシーの中で運転手は我々に向かって不思議そうに「何のためにこんなところへ行くのか」、「お前たち、ここがどんなところか知っているのか。マフィアがいて危ないところだ」と話しかけてきたことが示すように、スラムの住民以外のバンコク市民にとって、クロントイ・スラムというのは、未だこのように「劣悪な環境にあって、犯罪のような社会不安の温床となっている空間」であるというのが一般的な認識なのである。実際に麻薬犯罪などの温床となっており、例えば、成人の麻薬犯罪は重罪で死刑にもなるため、逮捕されても罪の軽い子供を使った取引が行われることもあるというのがスラムの現実なのである。

参考文献

- 橋本祐子（1984）、「バンコクのスラムー貧困がもたらす停滞と移動者がもたらす社会不安ー」『アジア経済』第25巻第5号、pp.63-86。
- 秦 辰也（2003）、「タイの都市スラムに見る参加型開発」『地域開発』、pp.59-63。
- 原 かおり・新田目夏実、（1984）、「マニラのスラムー向上意欲の高いスラム住民ー」『アジア経

济』第25巻第5号、pp.111-131。

原田 泰・井野靖久 (1998)、『タイ経済入門』日本評論社。

Harris, J.R. and M.P. Todaro (1979), "Migration, Unemployment and Development: A Two-Sector Analysis," *American Economic Review* 60, pp.254-259.

早瀬保子 (1984)、「ジャカルタのスラムー住民の特性と意識ー」『アジア経済』第25巻第5号、pp.87-110。

加納弘勝 (1984)、「アンカラのスラムー社会経済危機と自暴自棄型の社会的態度」『アジア経済』第25巻第5号、pp.40-62。

Kitti Limskul (1993)、「インフォーマル・セクターにおける世帯の住宅ニーズと購買可能性」(パスク・ポンパイチット、糸賀滋編『タイの経済発展とインフォーマル・セクター』アジア経済研究所、pp.69-87。)

森 健・新津晃一 (1984)、「特集によせて」『アジア経済』第25巻第5号、pp.2-4。

中西 徹 (1991)、『スラムの経済学』東京大学出版。

中西 徹 (1995a)、「マニラ都市圏におけるスラムの変容」『京都大学総合的地域研究』、pp.29-34。

中西 徹 (1995b)、「フィリピンにおける都市インフォーマル部門の変容1985～94年」『経済学論集』第61巻第6号、pp.42-63。

新津晃一 (1984)、「発展途上国の都市化とスラム」『アジア経済』第25巻第5号、pp.5-17。

新津晃一 (1998)、「スラムの形成過程と政策的対応」(大阪市立大学経済研究所編『アジアの大都市(1)バンコク』日本評論社、pp.257-278。)

新津晃一・橋本祐子 (1984)、「資料表：発展途上国4都市のスラム比較調査」『アジア経済』第25巻第5号、pp.132-146。

Romatet, E., (1983), "Calcutta's Informal Sector: Theory and Reality," *Economic and Political Weekly*, pp.2115-2128.

Todaro, M.P., (1994), *Economic Development 5th*, Longman.